火星人先史・川又千秋

火星人先史・川又千秋

早川書房

検印廃止

火星人先史

昭和五十六年二月十日　印刷
昭和五十六年二月十五日　発行

定価一三〇〇円

著者　川又千秋

発行者　早川清

発行所　株式会社　早川書房

郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話　東京（二五二）一五二一（代）
振替番号　東京・六-四七九九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

火星人先史

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

第一章　前夜……五
第二章　異境……五一
第三章　戦線……一〇三
第四章　連帯……一五一
第五章　決戦……一九五
第六章　神話……二三九
第七章　栄光……二七五
あとがき……三二

第1章　前夜

1

《サウス・ベルト・10》は、ここからゆるやかな長い上りにかかる。

軽くブレーキを踏んで、太陽車（ソラー・カー）の行脚をとめたノヴ・ノリスは、胸にさした螢光ペンで、慎重にルート・マップにチェックを入れた。

地図のインフォメーションによれば、この先五度ほどの傾斜が百キロあまり続く。三馬力に満たない太陽機関（ソラー・モーター）に無理をさせるより、補機のエンジンで一気に峠まで駆け上った方が、むしろ経済的というものだろう。

ノヴ・ノリスは天蓋のないコクピットからドアを跳びこえて軽々と車外に降り立った。地球の三分の一という引力が、彼にとっては何より快い。

大きく深呼吸した彼は、胸にかけたシャックルを使って、最大限に展張されている受光帆（ソラー・セール）を三分の一ほどに切りつめていった。出力の大きな補機でクルーズする場合、帆（セール）が空気抵抗によってもぎとられてしまうことがあるからだ。

手際よく作業を終えると、ノヴ・ノリスはコクピットから双眼鏡をとり出し、行手にただ一直線

にのびる《サウス・ベルト・10》を見晴らした。
ここは火星南西象限、南緯十度、この半球を代表するアラムとコプラテス・ヨークの両都市を結ぶ、東西二万三千キロメートルに及ぶ幹線道路サウス・ベルト・10のちょうど中間付近にあたる。西経三十六度をすこし越えたあたりに違いなかった。
もっとも幹線とは名ばかりの、むきだしの整地路がサウス・ベルト・10の正体だ。実際、アラムを出発して丸二日間、ノヴ・ノリスは一台の地上車にも出会ってはいなかった。
荒れはてた石ころと砂の赤い大地、そのそこここにひねこびた植物群落が、むしろシミのように不釣合いな色調で点々と拡がっていた。そして、その中央を、サウス・ベルト・10がただひたすら西へとのびている。火星第二の都市コプラテス・ヨークまで、あと千キロとすこし、順調に進んで三日の旅程だ。
と、ノヴ・ノリスの双眼鏡が、サウス・ベルト・10の路上を動く小さな点を見つけた。
一定しない速度で、それは西を目指して進んでいる。その動きは地上車とは思えない。生き物だ。
ノヴ・ノリスは距離測定リングをゆっくりと回していった。しかしうまく解像できない。路上に立ちのぼる陽炎が邪魔しているのだ。
ノヴ・ノリスは、帆(セール)をたたんで軽快な姿になった太陽車(ソラー・カー)に再び跳び乗った。
双眼鏡をコンソール・ボックスにしまいこみ、通信器のマイクを取り上げる。
目的の知らされていない偵察行ほどやりにくいものはない。ノヴ・ノリスは小さく舌打ちしながら送信スイッチを上げた。
〈サウス・ベルト・10を走破し、その途中で目撃するすべてを報告せよ。定時連絡は五時間おき、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その他、活動する物体を目にした場合は即時報告のこと〉

ノヴ・ノリスが受けた指令は、これだけのものだ。何を偵察するのか、敵は何なのか、ノヴ・ノリスには一切知らされていないのだ。

幾度かスイッチを上げ下げした。

だが、応答はない。各バンドとも激しい空電に満たされている。

ノヴ・ノリスは、今度は声にだして悪態をつき、回線を衛星通信に切りかえてみる。だが、結果は同じだ。

そう言えば、何となく大気がざわめいて感じられた。あるいは高空を金属性の雲が通過しているのかもしれなかった。

ともかく、せっかくたくわえたエネルギーを通信器に食われたくはなかった。それでなくとも長旅では太陽バッテリー（ソラー）の効率が極端に落ちてくる。それを計算にいれて、今のうちにできるだけ余力をたくわえておかなくてはならないのだ。

ノヴ・ノリスは通信器の接続を絶ち、帆（セール）の回路を充電につなぐと、太陽車（ソラー・カー）の補機に点火した。

広大な荒野に地球製（ホーム・メイド）の強力なターボ・エンジンの咆吼が拡散してゆく。これまで行程のほとんどを太陽機関（ソラー・エンジン）だけで走破できたために、今も燃料計の針は優に四分の三を超えている。

ノヴ・ノリスは一気にギアを入れて車をダッシュさせた。

ひゅうひゅうと風が受光帆（ソラー・セール）をかすめて鳴る。

まだらな荒野が次第に縞模様となってノヴ・ノリスの視界を飛び去ってゆく。

（寒い土地だ）ノヴ・ノリスはゴーグルを顔に下ろしながらつぶやいた。

（早く任務を終えて、地球へ帰りたい……）実際、気が滅入る風景だった。希薄な大気が、地球の三分の一という低重力にもかかわらず、しばしばノヴ・ノリスをあえがせた。ことに高地へと向かう道では、いとも簡単に気圧が落ちる。

ノヴ・ノリスは慎重を期して、自動調節式の酸素マスクを口元にあてた。

少しスピードを上げると、舗装の不完全な悪路が身にこたえた。

低圧の六輪タイヤは、ガタガタと、大小さまざまの石や路面の陥没部を踏み続ける。

舌をかまないよう、ノヴ・ノリスは唇をしっかりとつぐんだ。

次第に、黒い点と見えた移動物が、はっきりした形をとりはじめる。

（ガルーだ）ノヴ・ノリスはゴーグルに薄く付着しはじめた砂塵を左手のグローブで拭った。（しかし、こんなところを……いったいどこへ行こうというんだろう？）

時速百キロほどのスピードで、太陽車（ソラー・カー）は見る見るその影に近づいていった。

若い牡のカンガルーらしい。

しかし、かなり疲労しているらしく、その跳躍は不規則で、しかも一回に十メートルほどしか進まない。

地球のカンガルーは、ふつう体長の約五倍、つまり八メートル前後の距離を一回で跳ぶ。そして時速三十キロを越えるスピードで、中距離を走り抜く。それに対して、ここ火星に適応したカンガルーたちは、一回に十五メートル以上も跳躍し、時速五十キロ以上のスピードで約半日走り続けることもある、とノヴ・ノリスは資料で知っていた。

だが、いまノヴ・ノリスに先行する若いカンガルーは、数回弱々しく跳んでは太い尾で身体を支

えて息をつき、そしてまた跳躍にとりかかるといった様子だ。
ノヴ・ノリスは、その背後に追いすがりながら、短くクラクションを叩いた。
ちょうど着地して尾を地上に下ろしたその牡は、ちらりと横目でノヴ・ノリスの車を認めたようだ。だが、すぐに頭を前方に向け、新たな跳躍にとりかかる。
（なんだい、無愛想な奴だ）
ノヴ・ノリスは三日ぶりに出会ったこの道づれに再びクラクションを浴びせ、ギアを落として一気にその横へ追いついた。さらにギアを下げ、カンガルーに速度を合わせる。
カンガルーの背には不格好な雑嚢がしばりつけられていた。その開口部から突きだしている棒状のものは、あるいは銃身かもしれなかった。ノヴ・ノリスはやや緊張した思いで、腰につるした自分の武器を確認した。
ささやかれている武器商人の噂はやはり本当なのだろうか。しかし、あんな豆鉄砲の百丁や千丁が何かの脅威になるとは考えられなかった。だがノヴ・ノリスは一応任務を遂行すべく、片手で通信器のスイッチを入れた。しかし、また空電の雑音だ。中継基地との交信は途絶したままだ。
（まあいいさ、大したことじゃない。たかが逃亡ガルーを一匹見つけただけだ）ノヴ・ノリスはゴーグルの奥で眉をしかめた。
人間の入植地を逃れ出るカンガルーたちを、逃亡奴隷を真似て呼びはじめたのはいつの頃からなのだろうか。しかし今では、そんな呼び方すら意味のないものとなってしまっていた。
今や都市の人間たちのほとんどは、カンガルーを生活のなかに置きたがらなくなり、むしろ積極的に荒野へと追いやるようにすらなっているという。

カンガルーの労働力を未だに必要としているのは、辺地の小農場くらいのものだろう。
「おい！」
受光帆（ソラー・セール）が風を切る耳ざわりな音に負けまいと、ノヴ・ノリスは声をはり上げた。
「おい、ガルー！　だいぶ、まいってるようじゃないか！」
カンガルーは不意にノヴ・ノリスがどきまぎするほど毅然たる顔つきで振り返った。
そしてまたしっかり前方に目を向けると、強い跳躍でたちまち十メートル以上先行してゆく。
ノヴ・ノリスは舌打ちするとエンジンをすさまじく咆吼させ、再びカンガルーの横に追いついた。
「ガルー！　そうつれなくするなよ、俺は地球人だ！　分るか、この惑星の者じゃない！　どうだ、喉が乾いてるんだろう！　そら、受けとれ！」
若いカンガルーの意志力に満ちた横顔を眺めるうち湧きあがってきた曖昧な劣等感を振り切るように、ノヴ・ノリスはコクピットのかたわらから水筒をとり出し、ひょいとカンガルーに放った。
カンガルーは一瞬足をとめ、器用に両手でそれを受けとめる。
ノヴ・ノリスもそれに合わせて車のギアを抜き、ブレーキを踏んだ。
水筒を手にしたまま、カンガルーは、しばらくの間、ノヴ・ノリスを疑いのまじった困惑顔で見つめている。
「飲めよ、ガルー。水なら、ここにまだたっぷり残っているんだ。長旅なんでね」ノヴ・ノリスは後部座席の水タンクを片手でポンと叩いてみせた。
そして、あるいはまずいことを口にしたかもしれない、と頬をこわばらせた。
もし水に飢えきったこのカンガルーの仲間があたりにひそんでいるとしたら、両倒なことも起こ

りかねない。ノヴ・ノリスは慌てて鋭い視線を四方に投げかけた。
しかし、赤茶けた一面の荒野に動くものは何もない。
ゆっくりとノヴ・ノリスはそのカンガルーに視線をもどした。
若いカンガルーの表情が、どこか柔らいだように見えた。長い骨ばった指で、カンガルーは水筒のキャップをはずすと、一瞬上目づかいにノヴ・ノリスをうかがって、思いもよらぬ素早さで水筒を口にあてた。音をたてて、たちまちそれを呑み干す。
「うん、ガルー。もっと飲みたいなら……」と、ノヴ・ノリス。
カンガルーは急に生気のよみがえった表情で、空になった水筒をノヴ・ノリスに差し出した。そして、少しおずおずとした態度で、雑嚢のサイドポケットを探ると、干からびた皮製の水筒を無言のまま取り出した。
「よし、わかったよ、ガルー。それをこっちへ貸しな。今、水を入れてやろう」
ノヴ・ノリスはくしゃくしゃの皮袋を受け取り、水タンクの蛇口をひねってそれを満たしてやった。
「そら、ガルー」
カンガルーはぴくりと耳を立て、何か落ちつかなげにあたりを見回しながら水筒を受け取った。さらに、耳をせわしなく動かす。
「どうしたんだ、え？　ガルー、どうしたんだ？」
ノヴ・ノリスの質問に答える風もなく、カンガルーはゆっくりと平原の一角に目を据えたようだ。
（ん？）ノヴ・ノリスは、コンソール・ボックスから双眼鏡を再びひっぱりだし、地平線近い荒野

をその視野でなぜてゆく。
（野兎か？　野兎の群だ！）
肉眼でもかすかな砂塵が見てとれた。恐らく数百、いや数千の、野兎の大群が西の丘陵を目指しているのだ。
ノヴ・ノリスにもそれが分った。
というのも、火星の生物相は幼児でも充分に諳ずることができるほどに単純なものだからだ。
まず、第一に人間がいた。探険時代から五次にわたる大規模入植期を経て、十万に近い地球人がこの地に降り立った。今や、その四世代目にあたる子孫が誕生しつつあった。
そして、カンガルーがいた。地球のオーストラリアに特異なこの有袋類を最初に火星へ連れ込んだのはアメリカ人だった。彼等は複雑な遺伝子操作の果てに、ゴリラに匹敵する高知能の変異（ミューテーション）をカンガルーにもたらした。そして、極端なエネルギー不足に悩む初期の入植者に、単純労働力および緊急時のたんぱく資源として、このカンガルーを与えていったのだ。
人間を火星まで運ぶには、何と言っても莫大なコストが必要だった。しかし、知能を高められ、前肢を自由に使えるとは言え、カンガルーの移送は、はるかに乱暴で安価な手段が可能だった。訓練センターで一定数にまとめられたこれら新種のカンガルーは、ダース単位でコールド・スリープ装置にすし詰めにされ、コンテナごと火星に送りこまれたのである。
その損耗率は四十パーセントを越えた。しかし、そのこと自体は全く問題にはならなかった。なぜなら、解凍作業によっても息をふき返さないカンガルーの身体は、そのまま罐詰工場に直行させればよかったからだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com